

あれでは心もとないだめだと、ならとではのならの人になってもらいたい。そして常に強い意思と非凡の努力が必要と思います。

八、郷土の将来は、どうあるべきかと思うか

現在の社会状況においては、至るところで過疎地帯と過密地帯が区分されてきました。わが郷土も向学のため、または職を求めて上方に出郷する青少年、一時的とはいえ季節労働者として郷外に出る人々が多く、官公職と商工業関係者以外は多くの老少年者ばかりで、当然過疎地域と考えられます。

農林業、商工業などの改革振興や観光開発にもいろいろと支障のあることも多いと思います。

収入源の大きな大島紬の織り子の一つを取り上げても現在四十歳以上七十五歳ぐらいのかたがたが従事しているようですが、この人たちの後継者の青少年者を一日も早く養成するのが、当事者または施政者の急務だと思います。

今後の郷土の振興開発のためには、ある程度の人的資源が、郷里に残存してこそ郷土の発展は期待できるものと考えられます。



発展途上の母間部落

昭和五十四年発行

「郷土の先輩」 徳之島防犯組合連絡協議会から

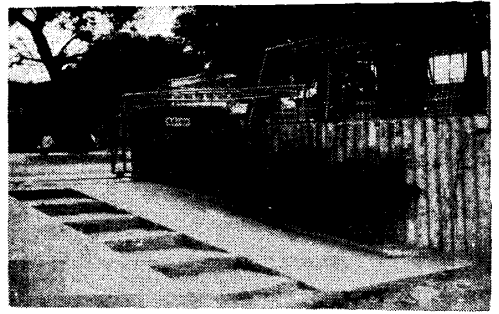
竜野 定 一

一、わたくしの生いたち

今の亀津小学校の敷地の大部分が明治二十二年三月六日わたくしが生まれた龍野家の屋敷でした。

当時の龍野家は屋敷の名を大富里と称し、これも小学校の敷地になっている後ろ隣りの安田家から、私の母が嫁入りした明治十年の頃はようやく持ちあげたほどの蒲ぼこ形の金延棒が十本もしまっており、朝飯を三十六人分炊いたというほど豊かな生活をしており、飼い牛も名牛「ツノキリ」と大牛の二頭、乗馬も二頭、外に役牛や役馬もあり、倉庫も二棟あって庫も馬小屋なども皆ユシのシンの五寸角の角柱で建てられ、一般の住宅よりも丈夫でりっぱな建物でした。

それに血族の者を大富里の一家といい、縁戚の者は禎宝、禎祥、禎啓、禎厚などと禎の字を名前に用いて禎びきと称し、その下にクワフダ（家の子）とヤンチュ（家僕）がおり私が若い頃まで鬮牛で名高い白井の為順がクワフダの頭となり、内喜美がヤンチュの代表でいろいろと世話をして働いていましたが、私たち兄弟が中学校に進んだ三十六、七年の頃には私たちの学資はもちろん何もなくなり貧しくなっていました。なくなりかけると財産ほどはやくなくなるものはありません。



龍野先生家跡の亀津小学校

二、貧しい者は教育を

「どんな小さな事業でも多少の設備資金や運営資金が必要であるが、教育をうけ学問をするには毎月わずかの学資があれば足りません。それこそ最低額の月賦で何年かの後には、最も確実に最高最大の成功をおさめることのできる良の方法は、教育を受け学問に励むことであるから貧しい時は何よりも教育をうけるがよい。」と私の父と母は考えておりました。

幸いに私も弟の隆直も健康であり成績も良かったので、学問に励んで龍野家の再興をはかるようにと両親から教え戒められ、私は三十六年秋に鹿兒島におもむき、三十七年四月今日の甲南高校の前身旧制二中に入学したが、学資に乏しいから外出もできず朝から晩まで読書し勉強したので、ますます学業成績はよくなって首席になり特待生として月謝も免除され、寄宿舎の食費まで滞納しても請求もうけず先生方から慰め励まされるだけでした。それで私はまことにありがたく勉強に励むことができ、広島の高師に入学、弟隆直は七高から東大法科に進み兄弟とも貸費生となって卒業することになりました。

三、わたくしの略歴と信念

私は大正二年三月高師を卒業、六月多くの生徒が処罰退校されたのを見て無処罰無試験の教育を発心し提唱しました。これは世界の教育者が今まで誰もすることのできなかった教育であるが、真に正しい人間を育てあげて、天国のように平和な世をつくり、極楽のように幸福な生活をいとむのが人類の理想希望であるならば、必ず成さねばならない教育の方法であります。

今日のようにすべての学校で試験や処罰のために教師や生徒が対立競争し、すぐれた生徒ほど競争をばげしくしている教育を改めて、すべての生徒を対立競争させず心から仲よく助け合い、励ましあって、何時でもよく学習し鍛練し、一人も残らずすべての生徒の志を成さしめ、ところをえさせるように教え導き育てあげなければ、真の平和幸福な世の中はできないと信じ、これが研究と実施に努力し精進したのであります。

大正十一年五月東京深川の善隣館館長となり、十三年八月大島中学校長に就任し、最後に昭和十五年四月今の東京都立竹台高校創立の校長となって完全に無処罰無試験の教育を実施したが、敗戦後は祖国再建のため社会教育に専心、全国公民館連絡協議会長、東京都社会教育委員会議長、青年学級振興協議会長、社会教育推進会長、社団法人国旗協会副会長、社団法人善行会理事など多くの社会教育団体の役員をしています。

私は人のぬうちというものは大臣になったとか知事や学校長など、何々になったかというところにあるものではなく、その人がどんなことをしたかということを決まるものだと考えています。それで私的生活を最少にして、公的生活を最大にし、物質的生活を最低にし

て精神的生活を最高にしたいとつとめております。つまり私の家庭生活はできるだけつましく小さくして、社会のためにはできるだけ大きく働きたいと考え、衣食住はじめ物質的な生活はできるだけ儉約し質素にして、精神的な生活をゆたかにしたいと考え努めており、これが私の両親の教えであり、また亀津断髪の精神で現代に生きる道だと考え信じております。

私がこう考え、こう信じて八十年を生きてきたのは、もちろん多年の学問研究と恩師の教えによる生活体験によるのでありますが、まだ「三つ児の魂は百まで」と申すように、幼い時に父と母から教えられいましめられたことが最も大きく私たち兄弟の生活と信念をつくりあげたと考えます。その二、三を記して皆さんにも考えていただくことにいたします。

四、父の教えの思い出三つ三つ

(1) 仲よく團結する

私の母かねの父安田佐和応は学問は委しく私もいろいろ教えていただきましたが、父前定の父龍植用喜は鉄砲や弓のことに委しく、私たちが子供のときまで大富里の家の已間の大床には、朱ぬりの鉄砲掛けに五つの鉄砲が飾られてありました。

それで私は父から鉄砲や猪狩りの話をいろいろと聞かされましたが、ある時の話に「昔の火薬はえんしようといつて、硫黄と硝石と木炭の三つをまぜてつくるものであった。硫黄も硝石も木炭もすべて火をつけ燃やすと、くすぶつて燃えるぐらいのもので爆発などす

る力はないのである。その三つを混ぜ合わせて一つにするとおそろしい爆発力のある火薬にもなる。人間の働きも同じである。硫黄や硝石や木炭のように平凡な力の持主であつてとくに秀ぐれた力はない人間でも、三人、五人と多人数が心を合わせ力を合わせて働くと非常にすぐれた大きな力を發揮し一人ではとてもできないりつばな仕事がなされるものである。

それで世の中に出て大きなりつばな仕事をするには、兄弟はもちろん多くの友人と争わず皆仲よく心をあわせ力をあわせて働くように心がけ努めなければならぬ。それでこそ平和なしあわせな世の中はできあがるのである。

「昔は冬になつて猪狩りをはじめるとき、徳之島全島三間切の有力者が集まつて親睦の宴会をするのが例であつた。その時、鉄砲はもちろん狩り犬などの品評会みたようなもので龍野の家がその中心であつた。前評判がいろいろあつた或る年の集まりに、祖父施用喜は自分の家で生ませて育てた四頭の兄弟犬だけを犬ひきの男にひかせていったが、隣り村のある金持ちが全島から買い集めた大きな犬ばかり十六匹つれてきた。龍野の犬は兄弟犬だから大きなものもおれば小さなものもいたので、その晩の主人たちの宴会中に十六匹の犬ひきの男たちがたびたび龍野の犬にけしかけるので龍野の犬ひきは困つてしまい、これをさけて争わせまいとするとよけいにけしかけてきてさげようがなくなつてしまったのである。そこで龍野の犬ひきが祖父にその事を申し上げると、「かまわなからけんかをさせてみよ」と言われたので、安心してけんかに都合のよい広い場所で休んでいたところ、

隣りの犬ひき男がまた十六匹を連れてけしかけたら、龍野の犬ひきが犬を放ったので大げんかになり、龍野の犬が隣の犬をかみ倒しておさえたが小さな二匹は隣りの大犬にかみふせられた。すると二匹の大犬がこれを見て自分でかみふせた犬をすてて隣りの大犬にかみつき、それをかみふせて二匹の小犬を救いまた隣りの犬をかみふせ助け合つて戦つたので、そのうちに隣りの大犬の一匹が泣いて逃げ出したところ他の犬も皆逃げてしまった」という話をして、「犬でも兄弟の情があつて団結すると少数でも強くなつて勝つ。烏合の衆は多くても大きくても愛情がなく団結しないから弱いものだ。」と、昔から歴史話をして聞かされました。私たちが貧しくてもりつぱな仕事をするには、資金よりも人間であることを知り、兄弟だけではなく友人たちとも仲よく協力し団結して働くことの大切なことを知つたのは、父に教えられたのであります。

(2) 自分の事は忘れて友の為に

「昔々、この世ができたとき一番偉い神さまがすべての神さまを集めて領地領分をお決めになりました。お前は山の神になれ。お前は川の神だ。木の神、水の神、海の神、井の神かまどの神と次々に決められたので、すべての神さま方が喜んでその持ち前の所に行かれるのをごらんになって、一番偉い神さまも大いに喜ばれ御自分も行つてなされると、御自分の行く所は決められなかつたので、どこに行つたらよいかわからず、いろいろと探しても行く所がありませんでした。

そこで一番偉い神さまも大変おこまりになり、他の神さま方とも相談して居所を探した

ところ、一番偉い神さまが部下の神さま方にはお気の毒と考へて、割りあてられなかつた便所だけがただ一つ残つておりました。一番偉い神さまはそれを知つて『よしよし、おれが便所の神になる』と言われました。それから、便所はどこの家でも外に建つて入口を低くし、便所に入る者はすべて頭をさげて入るようになったという話を子供の時機度か父から聞かされました。これで私たちは便所には一番偉い神さまがおられるのであるから、よごさずきれいにしなければならぬと思ひ、また、一番偉いすぐれた者は自分の事などは忘れて考へず、すべての者の事を考へて何時でもなすべきものだという気持ちがわかり、友だちの世話などをする気持ちがわかつたような気がします。

それに私たちが少し大きくなつたとき、母がまた「人間は上役に仕えるということよりも、多くの人を使うことがむずかしいものである。十人を使う者はよく十人の心を知らねばならない。二十人を使う者は二十人の心持ちを察してやらねばならない。百人の長となるには百人のお世話ができ、千人の長となるには千人の心をよく知つてそのお世話ができなければならぬものである。これは佐和応祖父さまの教えられたことである」とくり返し、幾度か話して聞かされたので、私が教師となり、学校長となつて多くの生徒を教え育てるにも、また社会教育者として世間多くの人のお世話をするにも大変私の戒めとなり、力となりました。

(3) 捨て石、無要の要

大富里の本宅があつた頃は何かの祝とか祭の時はもちろん、休みの日には禎用喜、禎賢以

下の兄弟や親戚が集まり、平生は山徳峯、亀藤盛など有志の方がたがお出になつてよく碁をうって楽しんでおられました。その時のお茶くみの役だけは女の子ではなく私たち男子に命ぜられましたので何となく碁の気分というものがわかつたようであります。ある時父の話に「碁というものはおもしろいものである。捨て石がうてるか、うてないかで男の器量がわかり、その捨て石のうち方で賢さと愚かさかわかるものである。捨て石もうてないような男はだめである。人間の生活にも世間の交際など全くむだと思ひ無要と思はれることでも、案外に役立つ大切なことがあるものである。」と言われ、「蛤の吸い物も貝の身しか食べないから貝殻は無要のようであるが吸い物椀に貝殻も入れておかなければ御馳走にならないだろう。大きないせえびの料理もえびの肉だけ皿に入れたのと、赤くきれいな殻もきれいに大皿に盛つてあるのとは違うだろう。」などと話されたことがあります。この話もまた私の今日の生活にいろいろ考えさせられ教えとなつております。

(4) 短所欠点を長所に

人間には誰にも短所欠点があるものであるが各自の知恵を自由にはたらかして研究工夫すると、その短所欠点あるがゆえに長所ができることもあるものである。短所欠点を歎くことなどは人の工夫が足りない証拠でこれこそは人としての恥である。

徳之島ではいつも一番になる優等生も角力や競争に最もすぐれた者でも、「あれは大富里のツノキリだ」といい、鬪鶏でも牛や馬でも常に勝つような強いものを他国ならば常勝將軍ということを「ツノキリ」と言う。その「角切り」というのは大富里の鬪牛であるが

体格は小さく、一方の角は折れており、普通の牛ならば鬪牛などのできる牛ではないのである。ところがこの「角切り」はまことにりこうで勇気があり、どんな大きな牛と戦わしても決して恐れずその一本の角ですぐに敵の頭の中心のマキを突くのである。マキを突かれるとどんな牛でもすぐ敗走するので常勝將軍となり、「角切り」という名が常勝將軍という意味に用いられるようになったのである。

牛でさえも短所を気にせず、それゆえに一本の角だけで戦うマキ突きの戦法に出ると常勝の名牛となるのである。人間は自分の短所欠点など歎かず貧乏など気にしないでこれを活用することの工夫が肝要である。

(5) 新道ができて旧道を忘れるな

「亀の甲より年の功」というように、年とつた人の経験というものはまことに貴いものである。新しい学問の研究も大切だが、昔からの多くの人間が経験したことなどを教えた諺などには、今日の生活にも極めて大切なものがある。「唾はのめ」「痰ははけ」というが人間の唾液は大切なもので、これはすべてのむがよく、たんは悪いもので、必ずはき出すのが健康のためによいのである。「馬はひく」「牛は追う」というのも「木もと竹うら」というのもまことに大切な経験からでた教訓である。「木もと」というのは、木を割るときは木の根の方から割るとたやすく割れるが、末の方から割ると割れないものである。竹を割るときは反対に竹の末の方から割るとすぐ割れるもので「新しい道ができて旧道を忘れるな」ということもある。すべて経験者の経験は大切にすべきものである。

(6) 真の孝行

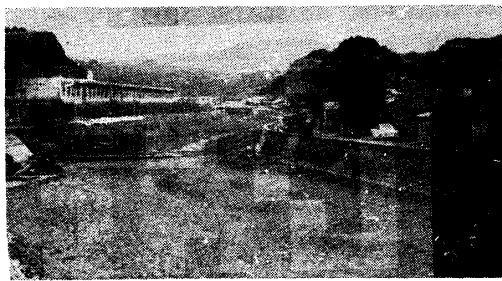
「家貧しくして孝子あらわる。」というが、孝行というものは親に仕えることだけではない。「いつまでもあると思うな親と金」というように、どんなに元氣な親でも何時なくなるかわかるものではない。どんな財産でも何時どんなことでなくなるかわからないことは、大富里の財産がなくなった時の事を思えばわかるだろう。

そこで真の孝行というものは、「お前の親がお前を愛して育てているように、お前自身でもお前自身を愛して育てることに努めるのが親孝行である。お前の親がお前の弟を愛して育てているように、お前もお前の弟を愛して教え育てることに努めるのも孝行である。そして、お前たちの親がお前たちを愛して、できるだけの教育をしたように、お前たちもまたお前たちの子供を愛して、できるだけつばに子供を教育することに努力するのが親に対する孝行というものである。こうすると親まさりの子供が育ち、子供まさりの孫が育って、一家は末広がりになり栄えて広がり、国家社会もますます栄えることになる。これが真の孝行というものである。」と言われた。

私と弟隆直が仲良く助けあって、弟が私に従順であり、私が弟よりも成績が良いの自分分は高師に入学して、弟を大学に進ませたのも父の教えを守るためであり、また、すべての生徒を愛して育てたのも父のこの教えを思えて、恩師坂牧校長や津隈秋江先生、関恰先生が私を愛し育てたように、私も生徒を愛し育てたいと考えて努めたのであります。

五、母の教訓

父の教えとともに私の生活信念を育てあげたものは、子供の時の母の教訓であります。私が中学校に進学することが決まったとき、母は私を膝下にまねいて将来の希望目的などを尋ねたので、「私は学者か教育者などになるだろう」と答えたところ、母は襟を正して次のお話をなさいました。「世の中の人にはよく『稼ぐに追いつく貧乏なし』とか『花より団子』などと申すが、それは稼ぎ人という農工商の人たちの心掛けである。農工商の人たちは朝早くから夜おそくまで働けば働くほど多くの収益が得られて豊かになり貧乏することはないのである。しかし学者や役人など俸給生活をしている者はいくら働いても一定の俸給以外に収入があるべきものではない。もしお金や物質などの豊かな生活がしたければ学者や役人などになるものではない学者や役人にはお金よりも別に貴い物がある。それで農工商の人たちは一時間も油断せず働いてお金を稼ぎたくわえることに努めることが大切だが、学者や役人などは昔から『食い出しはあるが稼ぎ出しはない』『得を取るより名を取れ』と教えられ、質素儉約を重んじて日常の生活をつつましくし、決して稼ぎ根性を出さず一時間でも学問修行に志して読書研究につとめすぐれた学者になり役人になって世のため人のために役立つように働くことを心掛け、努力精進しなければならぬ。だから将来りっぱな学者になり役人などにな



先輩をはぐくんだ大瀬川

りたいならば、今から十分注意してあまりぜいたくをつつしみ、儉約につとめ質素な生活に慣れて、人のために働くことを楽しむように心掛けて勉強に励まなければなりません。」と事例をあげてねんごろに教えたとされたことが深く私の胸にしみて八十歳の今日まで私の生活をつくりあげるものになったと考えています。

母は安田佐和応の長女として子の年生れ、明治十年丑の年に父佐和応に伴われて鹿児島に旅行し、西南戦争のために難儀したが帰って来ると龍野の家の嫁として迎えられました年十四歳、しかも夫である私の父前定はこの時、川上親晴などにさそわれて沖繩へ行つて勤めており、この夫のいない若妻は十七年に父が帰宅するまで七、八年間一方ならぬ苦勞をしたのであります。それで十六歳の時には、われ親なし児、人間ならじおくれ、二月桜花さかじおくれ、われ親なし児、こなすほどこなせ、こなす田の稲やあぶし枕。と歌って独り慰め、独りで励まして働いたと申し、年老いても時折り歌って私たちまで励まして下さいました。十六歳の少女が「二月桜花の咲かすにはおかないように、時が来れば人間にならないではおかない」とひそかに自から誓って希望に燃えた心持ち、そして、「こなすほどこなせ。田圃でもこなした田の稲こそはやがて秋になるとあぜを枕にして実るように自分も成人すると必ずりっぱにみのり人間になる」と励んだ決意を思うと、私たちもまた「憂き事のなおこの上につもれかし」とさえ考えて、どんな困難にもたえ、将来の希望を燃えたのであります。

六、恩師秋江先生の感化

在学五年間、私は学校長坂牧善辰先生と漢文の津隈秋江先生、英語の関恰先生から非常なお世話になりました。この秋江先生は日向の大学者安井息軒先生のお弟子で、当時の九州では並ぶ人がないほどすぐれた儒者であり詩人で書家でありました。私は秋江先生に師事して、先生の清廉高潔な人格と清貧の生活に深く感化を受け、また漢学を学び儒者の教えによって人間にはすべて使命天分があることを知り、「生ある者は天禄があり」「天は人を殺さず」ただ「天の与える所をとらなければ禍がその身に及ぶ」ことや「順天は生き逆天は亡ぶ」こと「菜根をかみえて百事成すべきこと」を信じ母の教訓と相まって、私はますます儉素な生活に努めて最高の精神生活を志し、最少の物質生活にたえ得る事を喜び努めるようにさえなりました。

七、弟隆直との自炊生活

三十九年四月に弟隆直が亀津の高等小学校を卒業したので二中に入學させ、私は寄宿舎を出て弟と自炊生活をはじめたところ、窮乏はいよいよ甚しく鹿児島に慣れない弟がうっかりして、六月十七日には「一銭の金も一粒の米もなくなったから喜久里叔父さまにお金を借りて来てよいか」というので、おどろいて台所を調べるとただ薪があるだけで真に何もなくなっておりました。

喜久里というのは鶴田義嶺と二人、私の父が指導し助信して育てた母間麦田の金満家で夫人の病氣治療のため鹿児島に来ていたのであるから、話せば金はすぐ貸してくれるが私はかつて父から教えられたことを思い出し、お金を借りることを許しませんでした。「少

しの米や味噌でも残っていた昨日ならば喜久里叔父さまからお金を借りてもよいが、何もなくなつた今日は親か兄弟の外に助けを求めるとは許しません。それがお父さまの精神であり教訓です。断食の行をするつもりで当分は学校を休み、机前に端座して静かに読書し勉強することにしてしよう。人には縁というものがあり運というものがある。私たち兄弟が死ぬはずがない。きつとお父さまが何かを感じて助けてくださるに相違ない。幸いに薪だけはあるから朝に晩には水を釜に入れて火をたき、飯をたいている真似をして家主の長野夫妻に気づかれないようにしてほしい。もし長野が欠席のことを尋ねた時は兄が少し病氣だからと答えておけばよい。」と申すと弟隆直は一言もさからわず従順にうなづいて、すぐ釜の下に火をたいて夕食の炊飯の真似をはじめました。私はほんとうに頼もしい弟だと感じ、これなら必ずりっぱに育てられると考えて心から喜びました。そして慰め励まし合つて静かに勉強していると、今までは電報でお頼みしてもすぐには送られない学資が頼みもしないのに十九日午後おそく父から五円の電報が替がまいりました。「為替が来たのだから明日の郵便局を待つ必要はない。すぐ喜久里叔父に持つて行って、兄が急に必要だからと申し現金をもらつてくるがよい。」と申すと、如何にも嬉しげに出かけて行つた弟の笑顔は、今も眼中にあつて忘れられないがあります。

八、五厘でつなげる生命

この時に私はいろいろ感得したものがありませんが、第一、昔から伝えられている仙人というものは何を食べたものであろうか。また飢饉の年には多くどんなものを食べて人は生

きたのであろうか。と考え、先生にお頼みして学校の蔵書をすべて読んでしまい、さらに私の学友八木三千彦君の父君鈴彦先生が県立図書館に勤めておられたので、図書館の蔵書をも借りて読めるだけ読みました。するとある蔵書の中に、当時の金二銭分の玄米と、豆胡麻その他を蒸して団子につくり、これを四等分して一回に一個ずつ食べると生きながらえることができる」と書いてあるのを見出し、私は「人生の目的は美衣美食にあるのではない。天地に恥じない生活をして広く社会を益し後世に残る活動をするのである。」と教えられておるので、五厘あれば生きられると考え喜び勇んで左の文を草し、今までの座右の銘とともに朝夕朗誦したのであります。「汝、定一!! 一日五厘でつなげる命をつなぐために、汝の頭を権門に垂れること勿れ。」「汝、定一!! 一日五厘でつなげる命をつなぐために、汝の膝を権門に屈すること勿れ。」かくて、私はますます儉素の生命を樂しみ安心して私のすべての時間、すべての精力を勉学に傾注したので毎学年首席となり、卒業成績は二番篠原君の平均点九十二点に対し九十九点となりました。そして、今日まで決して権門に屈せず義を争い義を争わないで物欲を捨て去り、今日の人たちが思いもおよばないような質素な最低の物質生活に安んずるようになりました。

八十歳を越えた今日でも、私は決して休むとか遊ぶということなどは考えず常に読書研究につとめて、自分の事を忘れ国家社会のために尽くすことを樂しみ、眼前の小きな利害などは見むきもしないのには前に述べたように、少年時代から亀津断髪、き飯坊ガナとして育てられ、清貧を苦とせず誇りとさえするようにと教え鍛えられた慈母の慈訓と嚴師嚴

父の嚴訓の賜物であります。

九、坂牧校長の「好意」

中学校での成績が非常によかったので、五年生になると校長坂牧善辰先生が私を招いて「東京の木場貞長先生たちとも協議の上で、君が大学を卒業するまでの学資は約束することができたから、母校の名誉のためにも一高に入学し東大の法科に進んでほしい。」と言われました。私は「弟の隆直はどうしたらよいでしょうか」と申し上げると「隆直君は師範の二部に入れたらよいではないか」と言われたので、私は最悪の場合は広島の高等師範に入学して弟を大学に進めます。私が大学にいて弟を二部に入れたときの大学卒業生と二部卒業生を加えた私よりも、私が高師に行つて弟に大学を終えさせた、高師卒業生に大学卒業生を加えた私が大きいです。

これが私の父の教えであり私の念願であります。それに、私は高等師範に行つてもりつばな仕事ができると思ひますからお許しを願います。と申し上げると坂牧校長も賛成されました。するとまた数日たつて先生が私をよばれ、「君の卒業後の事をいろいろ考え、君の希望も思つて話し合つたが、幸い東京の高等工業には離島奨学金がある。「君は数学と物理の成績が特によいから高工に進んだらどうだ。」と言われたので、坂牧先生の限りないご好意ご温情に感謝して、その手続の相談中に二番の篠原君が「定一!!君はどこにでも行けるが僕は貧しくて行く所がないのだ。高工の奨学金を僕にゆずってくれないか。」と云うのでまた坂牧校長にお願いして高工も篠原君にゆずり、私は鹿児島県の推薦生として高等

師範に入学し、篠原君は高工に、やがて弟隆直は七高に入学し東大独・法科を卒業したのであります。

当時の学友はもちろん先輩方も私を叱り、馬鹿だとまで評することもあり、今でも惜しいことをしたものだと言ふ友人がありますが、私自身は決して後悔したこともなくやはりいことをしたと考へております。それもやはり「三つ児の魂」というものでしょう。

十、二中の成績と大島の青年

考へたよりも原稿が長くなつたが、青少年諸君の参考に申し添えると、三十七年四月二日に入学した大島出身者は与論の池田徳明君と私二人だけでした。当時の鹿児島は封建の弊習が甚しく士族平民とか、城下士だ郷中だと区別し、同じ市内でも上方限だ下方限だと差別感情が強く、大島の者は島人として特に蔑視し見下げたものでした。私はこれと争うても仕方がないから父の教訓を思い出して先ず自分の力を養ひ、次いでできるだけ多くの友だちと協力することに決心し、私はさらに精出して勉強したので大島の先輩方の喜びは大変なものでした。

そこで私はすぐ大島各町村の村長さんと有志に対し、多くの優秀な生徒を二中に入学させることを頼みしたところ、皆喜んで賛成したので二中には大島出身の優等生が多く集まり、私が五年生になった時は二中の正副級長や優等生の多くは大島出身者となり、次いで、寄宿者の室長はすべて大島出身の者で占めるようになりました。

その頃の主な友達を思い出すと、私に次いで三十八年三月には永良部の加納直綱（東大

山梨大教授)、天城の盛景好(校長)、窪田義照(東大)、私の従弟安田豊敏(長崎医)川浪知熊(京大、大阪市技師)が入学し、二十九年には永良部の操担道(九大教授)、有馬西秀(長崎医)、東貞良(首席校長)、喜界の平元明(首席、九大医)、英義彦(日大教授、代議士)、古仁屋の福井英一(高師、中校長)、森貞彦(東大、地裁所長)、私の弟隆直(東大、弁護士)、四十年には里嘉栄則(東大)、勇友恵(首席、東亜同文)、林有沢、続いて、伊藤隆治(東大)や安田重雄(東大)、篤晴興(東大、呉市会議長)、永野芳辰(東大、知事)など、その他大勢の者が入学して仲よく助け励ましあつて勉強したので、二中における大島出身者の信用と威力はまことに高く、二中第二代の校長加藤周一先生は二中が一中に勝つたためには大島の生徒を多く入学させるのがよいと考え、四十二年三月の入学試験は名瀬でも行ないその時に合格した一人が伊東隆治でした。

私たち中学校の子供でさえも同結協力して勉強すると、実に封建差別の思想が強かった明治時代の鹿児島でもりっぱに打ち勝ち、成功することができたのであります。それほど大島の者の素質は優秀であるのであります。それで今の大島高等学校の前身大島中学校も大正十三年に私が学校長となつて皆を励まし、すべての生徒を仲良くさせて学ばせ鍛えたので、今までの劣等感などはたちまち消え失せて団結一致し、師走和親、学友共励、日曜も休暇も休まないで先生方がお困りになるほど勉強し、鍛練に励むようになり、三年たつと県下中等学校庭球大会に優勝し、続いて剣道も角力も水泳も覇を争い、ベルリンのオリンピック大会には水泳の勝久とレスリングの吉岡の二種目二人の選手を送るほどになり、

学業成績も東大、一高をはじめ全国の有名校に入学するようになって、一中に勝るとも劣らない成績をあげ、わずか五、六年で県下の名門校になつたのであります。

十一、青少年諸君へのお頼み

この秀れた素質をもつ大島出身者が今や鹿児島をはじめ大阪、神戸や東京などに何万人と大勢が住んでおります。これが今日のようにお互いでの競争をやめ小ぜりあいなどしないで、同じ奄美の出身者として心から親しみ助けあい励ましあつて働いたなら、経済に、政治に、その他すべての方面で、どんなにかりっぱな仕事をし、どんなにか大きく発展することだろうと思つと、私は各地の実状を知っているだけに、ときどき歯をくいしばつて無量の感慨に胸を暗くすることがあります。否、神戸、大阪や鹿児島どころではありません。私たちの生れた最もつかしい徳之島、私たちが嬉しい時も悲しい時もまず思い出して元気づいて立ちあがる生れ故郷の徳之島を考えて下さい。

他の島々とは違つて山もあり川もあり、田も畑もあつて交通もよく、しかも奈良朝の昔から種子、屋久、登久とならんで中央とも連絡があり、文化も開けたはずの徳之島が幾多の人物を輩出しておりながら、今日もなお昔の三間切そのままに三ヶ町に分れ、また、その小さな町内で町長を争ひ農協会長を争うのはまだよいとしても、選挙のために罪のない町民を二分して対立させている現状は、これこそ火蝸牛角上の争というもの、全くやるせないものがあります。人口わずかに五万、交通も開け文化の発達した今日の徳之島では、思い切つて有志先輩の方がたが自分の事を忘れて対立をやめ、全島を一つにして市政を施行

し、農協も一つとなって総合的に全島の開発に努めたなら、これこそ「徳は得なり」で、どんなにか産業が発達して全島民の生活が安らかになり、美しく楽しい観光地徳之島ともなれば幸福な得の島ともなるのではありますまいか。私はこう考え信じているのであります。

そこでわが徳之島の青少年諸君は、半分は外に出て働くがよく、半分は島にとどまって日本国ではただ一つの亜熱帯地方としての太陽光線などの特点を十分に利用し、新しい島の産業を開発して祖先にうけたまたとない郷土を真に貴い楽土とするように、皆さんが仲良く助けあって働いてほしいのであります。そのためには早く大島の農事試験場などは徳之島に移し、亀津と伊仙の高校なども十分に利用して研究を積み重ねるとともに、人間の真の価値とか、人間の正しい理とか希望というようなものを考えなおして見きわめることが肝要であります。

繰り返して申しますが、人間の真の価値というものは財産ができるとか、代議士などになるということよりも、世の中のためにどんな事をしたかということを決まるものであります。買収饗応や個別訪問とか事前運動などで、選挙法に違反し法定選挙費用を超過した多額の資金をつくるために、取ってはならない金までも取って使ったなら、たとい当選して議員になり大臣になってもそれは一時のあだ花であって、決して真の人間としての貴さにはならないのであります。

これからの徳之島の青少年、これからの日本をつくる青少年諸君に、私はくれぐれも熟

考して立ちあがるようお願いしたいのであります。